
その華は美しかった

祥雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その華は美しかった

【Nコード】

N91710

【作者名】

祥雲

【あらすじ】

崖の上に凜と咲く一輪の華。崖の下で美しい華を見守る若木。寂しがりやの華と、華を癒し、一緒に生きていこうとする若木の話。果たして、華の選ぶ未来とは――。

その華は美しかった

険しき崖に

凜と咲く一輪は

朝露に濡れて

白い花卉も艶やかに

厚い雲の合い間から

こぼれ落ちる 金の光に その身を晒す

やがて

芳潤な香りが

辺りを満たす頃

風が恋を謳い

鳥が愛を囀る

翅をもつ 小さな虫たちは

その手足に託された

文をくつけて

日ごと

華の元へやつてくる

山のものに、谷のもの

里のものもあれば、水辺のものもあつた

背の高さを競い、花卉の数を競い
わが身の美事さをひけらかす

絢爛豪華な文の中

華は無言を貫いた

じつとたたづむ崖の上

華は

ひとり

散りゆくつもりであつた

己が何処から来たのか 知らぬ華は
芽吹いたその時から ひとり 孤独であつた

『一つしか成せぬ 種ならば いつそ残さぬ方がいい』

ひとり散る 未来を選ぶのは 華の優しさであつた
次の華が 同じ孤独を 知らずに済むように

そして 華の命が尽きる 少し前

崖の下から 声がした

葉の青い まだ、しなやかさの残る 若木であつた

若木は ずっと 華を見ていた
華が芽吹いた その日から

人知れず 崖の下から 見守っていた

声をかけるつもりはなかつた
華が 美しく成長する様を 見られれば

たつた それだけでよかつた

いづれ 誰ぞの文を受け取り 種を残すのだろうと

若木はそれを 見守つていればよかつた

しかし 華は ついぞ誰の文も受け取らなかつた

日に日に 枯れ行く華に

若木は 声をかけずにはいられなかつた

「私が、貴女の傍で生きましょう」

華は 静かなまま 姿の見えぬ声の主に 首を振つた

若木は尚も 言葉を重ねる

ひとつ、ひとつ 華の心に 届くように 祈りをこめて

「枝を伸ばします、貴女のいる崖の上まで。 きっと直ぐに貴女の傍に参ります」

「貴女の元まで 枝が伸びたなら、幹を強く太く致します。
風が貴女を攫わぬように、我が幹が盾となりましょう」

「幹が強く、太くなつたなら 空いつぱいに葉を茂らせます。
強い日差しに 貴女が焼かれてしまわないように、我が万葉が傘となりましょう」

「花を咲かせて 木の実を落とします。 貴女が寂しくならないように。 貴女の傍に」

「秋に木の実がなつたなら、鳥が沢山集まります。 その鳥たちに運ばれて いつか貴女の仲間も来るでしょう。 貴女が仲間に囲まれる その日まで 私が貴女と共に 生きましょう」

華は 若木の想いが嬉しかった

言の葉が 重ねられるうちに 孤独が癒されていくのが分かった

しかし 華はもう しゃべれなかった

若木に 返事を返す 力がなかった

頷く、命が 残されていなかった

だから 華は

己の命と 引き換えに

大地に ひとつ 種を落とした

(後書き)

……ジャンルを恋愛にしてよかったのかと迷う。いや、しかし恋愛だと信じたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9171o/>

その華は美しかつた

2010年11月14日22時05分発行